

歌集『あかね雲』より（六）

登美子

三島池の桜の賑は夢なるや

枯れ葦そそぐを鴨と眺めおり

朝間より雪深々と降り積もる

誰か来ぬかなだあれもこない

薬など害多くして効かないと

電気治療器勧められたり

玄米を煎りて茶に入れ舌を焼く

熱きを飲みて畑に出てゆく

対抗のゲートボールに来てみれば

古里の友居てクラス会の如

年一度乗るか乗らぬかの新幹線

家の裏畑通り抜け行く

一日中除雪水がまかれおり

道は滑るし屋根にはツララ

星多く空に輝くこの夜は

宇宙の旅を夢見ぬわれは

風呂終えて日課の如く見る空に

今日一日の生活思わぬ

喊声あげ隣の屋根に布団干す

冬休みの子等眺めておりぬ

乗る人も降りる人も無きバスの来て

伊吹の里は北風の中

声合わせ山辺に降るる蟬時雨

告げたき事の何かあるらし

晴れてよし降りても又よし花菖蒲

今宵の風呂の格別によし

満天に我の行くべき星ありや

今しまたたく星が良きかな

ほのかなる樟脳の香を纏い来て

膝を正して法話に臨む

宮裏のゲート場に見るジェット機

日毎変わらぬ時間に行きぬ

河原辺の泡立草の花揺れて

近づく蝶の数を覚えて

この字あざの老人会の過去帳に

次に載るのは唯あらぬかと

夫の布団敷きつつわが手に

幼日の母の記憶をまざまざと見る

汗出して草刈るわれの後ろから

風送りくれる一両電車

芽の出でし秋菜見とどけ小半日

雨の図書館わが物とす

大揺れす風天空に定まりて

昼の息吹を糸に伝え来

川原辺に泡立草の花揺れて

夫が近づく蝶を数える

馬鈴薯も大根も出来の悪き年

倒産廃業無き農はよし

暑き日に夫は草刈りわれはケア

二人で奉仕に励みておりぬ

去年こぞ今年同じ処に曼珠沙華

老いて尚息災あり昼寝かな

野も部屋も花いっぱいのわれの幸

来年も生かさるるつもり種子を取る